
ENGINE

佐川伸竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ENGINE

【Nコード】

N7357M

【作者名】

佐川伸竹

【あらすじ】

不登校系屋上盗聴少年、刈谷透かりやとおるの平穩は突然聞こえた「音」によって破壊されていく

序章 1 「平穩」(前書き)

文章力に難があるので適当に読み飛ばしてください

序章 1 「平穩」

四月中旬、某中学校の屋上、貯水タンクにできた影で少年が一人、変わった形のイヤホンを片手にノートを取っている。コードは真っ黒な機体に刺さっており、飾り気のない風体からそれがいわゆる携帯オーディオ機器ではないことが分かった。イヤホンからは雑音混じりに2 - 3の数学の授業が聞こえる。勘の良い方はお察しだろうが彼は授業を盗聴している。刈谷透（かりやとおる）には教室に行かない事情があった。誰だつて靴箱が破壊されたり机にクギだらけだったり授業から戻るたび教科書が散乱していたら行きたくなくなるだろうが彼もそんなところだ。屋上には春の光が降りそいで貯水タンクの影も若干温まっている。透は猫背の姿勢で熱心にノートを取っている。教室に行かない「行けない、だけであつて授業自体は嫌いではないのだ。幸い教師は解くべき問題を口で何度も繰り返してくれるので雑音混じりでもなんとか聞き取れる。飛行機が上を通り過ぎて結構大きな音がしたがあまり気にならなかった。カバンから取り出したと慧を取りだしてからノートを取る片手間で見るともう授業終了の時間だ。予想通りチャイムが鳴り授業が終了する。チャイムはイヤホンと外、両方から聞こえた。今日はもう授業がないのでノートを閉じてさっさと寝つ転がる。イヤホンからは授業終了直後の明るい教室の音が聞こえてきたが無視した。寝つ転がったはずみで春の陽気に誘発されてそのまま寝てしまった。

「とおるくん、とおるくん、起きて」

ユサユサ揺らされて目が覚める。もう放課後の様で、野球部のなに言ってるかよく分からない声と合唱部のスーパースプラノボイスが耳の奥にまで響いてきた。眠い目をこしこしこすりながらゆっくりと声の主へ顔を向けると中原涼香（なかはらりょうか）がいつも

のようにこつちを見ている。

「こんなところで寝てたら風邪ひいちゃうよ」

この少女は教室にこない透にプリントを渡しに行く役をしている。整った顔立ちというのが透にはよくわからなかったが、とにかく彼女は学年の男子内で一定の評価を受けているらしい。ではなんでそんな人が毎日のように自分にプリントを届けに来るかよくわからない。弱みでも握られているのだろうか？真相は教室に行かないのでわからない。でも自分の盗聴を手伝ってくれる彼女にある程度は感謝していた。

「はい、プリント」

「・・・」

無言で受け取る。透はコミュニケーション能力があまり高くない。それが屋上で授業を受ける原因の一つであることを彼は自覚していなかった。ノート・シャーペンと受け取ったプリントをカバンに入れて透はそそくさと立ち去ろうとすると、涼香が引き止めるように「一緒に帰らない？」

といった。まっすぐな瞳がこちらを見ていて思わず吸い込まれそうになる。透は少し考えたが

「いいよ」

の一言がどうしても言えずそのまま固まってしまった。それでも少女は笑顔で

「行こっか」

と、透の服の袖を優しく持ってくれた。そのまま二人で歩きだす。たまにこんな自分が情けなくなる

序章 2 「音」

「・・・（これで最後か）」

透は手に持った新聞を乱暴な手つきで郵便受けにねじ込む。ギシギシというあまり心地よくない音がした。彼は家のためにアルバイトをしている苦学生だったりする。もう習慣化してしまったし、出て行った両親に特別恨みはない。深夜2時、ほとんどの家の明かりは消えていて街灯だけが光っていた。家に向かって歩き出す。配るのが決まって最後になる夏木さんのお宅から家までは歩いて20分ほど。夜の住宅街は驚くほどひっそりとしている。それはいつものことなのだが今日は特に「凄み」があった。気味が悪いからさっさと帰ろうか？透は足を急がせる。これから帰って寝る、朝になったら姉にたたき起こされる、8時には中原が呼びに来る、一緒に学校に行く、屋上で盗聴する、そんないつものサイクル。そのサイクルに透は安心してた。それこそ自分の平穏な生活なのだ。さて、家までの最短ルートはその角を曲がって中学校を通り、つきあたりを左だ。少しいそいそと歩く。学校は熱心な先生がいるのかいつも明かりがついているからなんだか安心する。学校にさしかかると、透は異変に気付く。明かりがついていない。そんな日もあるのかなと思ったが、思えば新聞配達を始めてから明かりがついていなかったことなど一回もないのだ。

「・・・（おかしい）」

体が異変に気付いている。足はもう止まってしまっていて、耳の裏あたりからは汗がにじみ出てきて、首筋をつたっている。指先は心なしか震えている。

（早く行こう）

とそう思った瞬間

『音』がした

何の『音』だろうか？いやそもそも「した」は不適切だ『音』は断続的に続いている。ただ不思議なことにその『音』がする位置が全くつかめない。近くなのか遠くなのか、はたまた強弱もつかめない。つまるどころ、自分は『音』を聞いていると感じているにもかかわらずその実態が自分にはわからないという不可思議な現象が起きていた。なんなんだこれは？しかし『音』は発生し続けている。意味不明だ

「・・・あ・あうあ・あ」

パニック状態。汗は全身から噴き出して鎖骨にはコツプのように汗が溜まっている。顔は極端に青ざめ、手は震えるというよりもう痙攣といったほうがいいレベルだ。しかしそんな異変に気づかないように街全体は恐ろしく静かだ。まさかこれが自分にしか聞こえてないわけじゃないだろう。しかしいまだ街は平穏で深夜2時の深い闇はますます暗くなるようだ。とりあえずこの『音』が何なのか解明しなければならぬ。透は少し身構える。

「・・・（落ち着け、落ち着け刈谷透、考えろ、）」

とりあえず足が固まって、逃げられるような状態でないことはわかった。どうやら、体は本能的に恐怖している。

「・・・（とりあえず音の発生源はどこだ？音がある以上音源だつてある。耳を澄ませばそれぐらいわかるだろう？探せ、探せ）」

ただどうやっても音の発生源など見出せない。全方向から音が来ているのかと思つたがそれも違うらしい。探せば探すほど音の正体は見えてこない。とその時、

一台のトラックが透の横を通り過ぎ、そのまま学校の横の民家の外壁に激突した。

「ッッ！！」
びっくりしたのはそこではない。トラックが外壁にぶつかっても音がせず、その外壁は傷一つなく、そもそもトラック自体がなくなっていた。

とたんにパニックになった。今、自分に、何が起こっているのだ？
「・・・（ちよつと待て、頭の整理がつかない！お、『音』は何なんだ？だめだ、わからない）」
その瞬間、『音』が近づいてきた。位置がよくわからないのに「近づいてくる」は変かもしれないが『音』は確実に近づいてきて、強くなり、激しくなり、心臓が張り裂けそうになってそうして、

はじけた

そこからの記憶はない。気付くと朝になっていた。服はそのままだった。

序章3 「異変」 (前書き)

「情状酌量の余地なし」って語呂がいいですね

序章3「異変」

8時になっても中原は来なかった。家に電話をするのも億劫だったので躊躇もせず家を出た。4月12日だったか？教室にいかない透は日付の感覚が乏しい。姉が花粉症はつらいと言いなながらヨーグルトに薬を混ぜて食べていたことをふと思い出す。かろうじて火曜であることは覚えているのだが、どうしても思いだせない。確か昨日のニュースでなんか行っていたはずだ。四月・どうしても思い出せない。今日は花粉が大量に舞うってことしか覚えていない。記憶力には自信があるのだが。

そんなどうでもいいことの片隅にはどうしても昨日のことが渦巻いていた。

「・・・（あれは何だったんだろう？）」

忘れようとしても忘れられない。心の奥底にへばりついたようにはなれない。ただあの『音』の内容については一切覚えていない。なんだか変だ。そもそも中原だって呼びに来なかったことなどなかった。

おかしい。生活のサイクルがおかしくなっている。姉には起こされなかった、中原は呼びに来なかったからこうして一人で登校している。

「・・・（次は盗聴できなくなるか？ばかばかしい）」

笑い飛ばしながらも透の心は恐怖していた。いやな予感がする。学校にさしかかる。当然あの外壁には傷一つなかった。校門には教師が立っていて生徒に暑苦しく挨拶を振りまいている。生徒たちは各々迷惑そうな笑顔で挨拶を返していたが、透は何の感情も見せず素通りした。教師も彼にだけは挨拶しなかった。玄関口、せいとたちが下駄箱にたまっている。靴を脱ぐ。靴をしまう。上靴を出す。上靴をはく、という行動を必要とするのでここには人が溜まりがちだ。人混みをかき分けて、透はぶっ壊された自分の下駄箱に脱いだ靴を

しまつ。上履きははかない。買って三日もたたないうちに隠されてしまふものなどいちいち持つていられない。靴下のまますたすた歩く。在籍している2・3の教室は二階にあるがそんなことはお構いなしに四階まで上がっていく。四階は1学年上の三年生のフロアだがあまり人はいなかった。各部活で早朝練習があるから三年がここに来るのはもう少し後になる。階の端っこにある非常階段と書かれたドアを開けて屋上に続く階段を上る。上靴をはいていたら、かつんかつんという金属音がしたのだが透は靴下なのでそういう音はならない。ただ古い階段のギシギシという音は共通で、それが密閉された非常階段に響いていた。ドアノブを握る。ゆっくり回すと錆びた金属のこすれる嫌な音がした。ドアを開ける。とりあえず生活のサイクルを取り戻そう、話はそれからだ。本来は使用禁止の屋上に人は寄り付かない。だからこそ透は屋上をいつも使っている。あそこは自分の空間なのだ。あそこに行つて落ち着いてそれから考えよう。そう、あそこにはだれもいない。

はずだった。いたのだ。人が

血まみれで横たわつた中原涼香が、

「・・・な、か、はら？」

昨日まであんなに元気だった、もう血の通っていない生氣のない顔を透は茫然と眺めていた。

1話その1「いつもと違う日々」(前書き)

家の製氷機にゴキちゃんが侵入したらしくできた氷が彼の体液で変色していました

1話その1「いつもと違う日々」

案の定だが盗聴はできなかった。おそらく教師か警察が中原の机の中を調べて盗聴器を処分してしまったのだろう。あれについては中原のほうから教師にいつてあるらしいから問題はないだろう。が、イレギュラー過ぎる日々だ。透は今、体育館裏の薄暗い所のコンクリートに座っている。こんなところ来たこともなかった。いつもなら屋上で授業を盗聴中だ。じゃあ、なんで自分はこんなところにいる？コンクリートと砂利の合間を縫うように生えた苔をじっとらむ。生活サイクルがバラバラになりすぎてわけわからない。とりあえず状況整理だ。いつものように屋上へ行ったら中原が血まみれになって死んでいた、あわてて警察に連絡したところすぐに飛んできてこっぴどく事情聴取を受けた、捜査のために封鎖されるから屋上は使えない、だから来たこともなかったここにいます。なんだかよくわからない状態になりながらも透の脳裏にはある問題がよぎっていた。

「……（俺も容疑者、だよな？）」
聴いたわけではないが多分そうなのだろう。だが当然のことながら自分は潔白である。自分は確かに中原と何事もなく帰った。彼女とは途中で別れたから後の事はわからないがともかく透は犯人ではない。

「……（ただ、証拠は……ない）」
家に帰っても姉はバイトに行つて留守だったから透が帰ったことを証明できる人はいない。そもそも二人で帰っていた（透が帰宅する前までは少なくとも中原は生きていた証拠）ことも証明できないのだ。これじゃ殺人犯扱いだ。となると透のすることは一つ、自身の潔白を証明する人を見つけ出すことだ。

「……（ムリだろ）」
そんなコミュニケーション能力を透は持ち合わせていない。でもや

らなければ自分が最も有力な容疑者だろうし、最悪、無実の罪で捕まるかもしれない。やるしかないのか？

「……（いやいやよく考える刈谷透、アリバイの立証とか無実の証明なんてのは警察の仕事だ、キミのような善良な一般市民が首を突っ込むことじゃないだろう？ そうだこんなことは天下の警察がやることであつて俺には何の関係もない話じゃないか！ よし・無視だな）」

代替自分から必死に動いていたらそれこそ「アリバイ工作でもしてんじゃねえか」って怪しまれてしまうだろう。今は自分が手を出さないほうが得策なのだと思ひに言い聞かせ、透はこれからの生活についてを考え始めた。

「……（やつぱ相談室くらいは頼らないといけねえのかな？ でもあそこ不良が石投げしてくるし担当教師は早く教室に戻そうと必死だし、いるせいとみんな気持ち悪いし手首切つて包帯ぐるぐるだし、いきなりわけわかんないタイミングで死ぬとか言い出すし理解できない世界だからな。どうしよう？）」

と試行錯誤している後ろから「ザッ」と言う砂利を踏む音が聞こえた。気づけば昼休みだし生徒くらい来るだろう。気持ち悪がられないように向こうへ行こうと。そう思った時、

「ねえ、ちよつと」

思わずびくつとなる。多分、同学年であろう女子生徒は自分に用があるらしい。こういうときは、

「……（無視！）」

ただ力強く無視を決め込んだ透の奮闘むなしく女子生徒はずんずん近づいてきて彼の肩を掴んできた。最悪のパターンだ。

「ちよつと聞いてんの！？ おまえよ刈谷透！」

話しかけられたことで心臓爆発寸前の透はゆっくりと顔を向ける。目の前にいる気の強そうな女子生徒はたしか上総慧（かずさけい）、中原の友人だ。

「……なに？……」

ホントは「俺は忙しいんだ話しかけるなこの愚民」と言いたかったがそんなことを言う勇氣は1ナノグラムも持ち合わせていない。二文字で精一杯だ。そんな涙の舞台裏を知らない慧は不審そうに「聞きたいことがあるんだけど？あ、キモいからよけいなこと喋らないでね」

「・・・う、うん（なんだよこの女怖っ！これだからリアルの女はいやなんだ。ってそれだと俺が二次元女大好きみたいない感じだけど俺はそこまで二次元好きじゃないってなんで俺は自分自身に言い訳してんだあアアアア！）」

パニック透をよそに慧は突如として深刻な顔になる。

「お前が殺したの？」

予想していた質問だ。予想していたのに透は口ごもってしまう。でも自分は潔白だ。勇氣を振り絞る。

「・・・殺し、て、ない」

「嘘つかないで！」

「嘘じゃない！」

あまりにも即答されたのでつい答えてしまった。すると慧はすごい剣幕で

「じゃあ誰が殺したのよ！」

そんなこと知らない。知るはずもない。しかしあまりにもすごい剣幕で言われたので透は眼をそらして

「・・・し、知らん」

その不誠実な対応に慧は

「知らんじゃないでしょ！じゃあ、じゃあ誰があの子を殺したのよ・・・」

うつむいてしまった。「うっ、うっ」という声だけが響く。ただ慧は嗚咽を押し殺して、ぬれた目をこすってこちらをまっすぐ見た。

眼もとには涙がにじんで赤くなっていた。透には直視できなかった。「私、ツぐう、見たの、ぐうッ、涼香と、おまえが、一緒に、帰ってるの、ツぐう、知ってたの、お前が、殺してない、ってこと、を」

どうしたらいいのだ？わけのわからない罪悪感で引き裂かれそうになる。でも女の子が一人泣いているという事実、なんとかしないと

「そ、そのっ、とりあえず、泣くなよ」

励ましになんかなるはずはない。自分の不誠実な応答が励ましになんかなるものか。でも何か言わなくては立っていられないような気分なのだ。

1話その1・2「いつもと違う日々2」（前書き）

使えると思ってQUOカード出したら「使えません」と言われた。
めっちゃ恥ずかしかった。三省堂と三洋堂は業務提携するか改名で
もしてくれえ。紛らわしい。

1話その1・2「いつもと違う日々2」

五分ほど経っただろうか

慧の濡れた声は止まり、強い表情を取り戻している。五分間おどどして動揺しつぱなしだった透のメンタルもだいたいぶ落ち着いてきたが、前に人がいるという危機に変わりはない。かれにとって会話はちよつとした事件だただ、目の焦点の合わない少年には聞きたいことがあった。

「あ、あのさ」

「何？」

瞬発的な反応に思わずびくっとなる。よく見ると、慧の目元はまだ少し赤かった。

「み、見たんだよね？、そ、その、俺と中原が、い、一緒に、帰ってるの」

「見たけど？」

「・・・そ、そう（よかった）」

とりあえず無実は証明された。思わず表情が緩んだ。

「きもち悪いからやめたほうがいいよ。笑うの」

慧が引き気味に言った。

「ご、ご、ごめん」

透少年にはいいことがあるとニヤニヤしてしまう癖がある。自覚はないのだがどうも少年少女たちには生理的に無理らしい。慌てて元の血液の通っていない表情に戻す。とにかく立証人が見つかったのだから、この凄く怖い女としゃべる必要性が見つからなかった。カバンを持って挨拶もなく立ち去ろうとすると。少女が慌てたように言う。

「この事、まだ警察に言っていないの」

なんですと？思わず振り返ると、砂利が音を立てた。

「じ、事情、ち、聴取、うけてない？」

「受けたけどテキストにごまかした。」

「な、何のために？」

透は頭を傾ける。考えてみたが悪い事しか思い浮かばない。首筋から背が垂れた。

「取引よ、このことをちゃんと警察に言っただけで済んだら私と教室に来い」

パシリとか奴隷とかは考えていたがそれは思い浮かばなかった。それは無数にあつた選択肢の中でも最悪の答えではないか。「最悪」というのは自分が考えていた「最悪」を軽々と飛び越えてくるということを今を持って実感した。

「ほらっ、昼休み終わるから早く行くよ」

「え、は、はいっ！」

俺の生活サイクルはどうなってしまうんだろう？じやりじやり音を立手ながらずんずん突き進んでいく慧を見てそう思った。

数分後、

市立系川中学校、二年三組の教室、屋上盗聴少年「刈谷透」の在籍しているクラスだが彼は一年生の一学期中に屋上盗聴を始めており中間・期末テストの日しか教室にこない偏屈な生徒で、今は四月なので来るはずもないどうだっていい存在だ。彼の机は部屋の隅でほこりをかぶっている。なぜか傷だらけでイスは背もたれが半壊していた。

そう、普通来るはずないのだ。

だからこそ教室は異様な雰囲気にも包まれている。まだ一学期が始まってそれほど経っていないにもかかわらず、もう偉大なる仕切り屋として君臨している上総慧があの子を連れてきたのだ。生徒たちが騒ぎだす。

「あれ、刈谷じゃない？」

「うわっ！ホントだ、なんで!？」

「マジかよ、上総、ホントに連れてきたぞ！」

「どうやって連れてきたんだろっ？」

生徒たちが謎の未確認生物でも見るような眼でこちらを見ながら口々に話し合っているのに少し満足気な慧は刈谷の袖をぐいぐい引っ張って教室の真ん中、教壇の前に躍り出る。

「みんな！約束通り連れてきたわよ！」

みんなの注目の的、刈谷透は顔を真っ赤にしてずっと右下を向いている。正直、死にたくなるほど恥ずかしかった。そんな透をよそに上総は自信満々に

「と、いうわけで向こう一年間、私の掃除は免除よ！」

そんな中学生的な約束かよと透は心の中で毒づいた。たぶんみんな自分なんか教室に来るはずないとふんで教師までもGOサインを出したのだから。

チャイムが鳴って昼休みが終わる。皆、各々の机に座りだした。

「じゃ、俺帰るから」

「何言ってるの？これから授業受けるのよ」

「だ、だって、お前、来いとしか、言っ、ない」

「黙れ」

「は、はいっ」

そう言つとさっさと自分の机のほうへ行ってしまった。透は30秒弱、ボーっとしていたが机のほうからいらんできたので部屋の隅にある自分の机をとりに行つた。

「・・・（あれ？俺の席どこ？）」

思えばこの教室に来るのは初めてだった気がする。期末・中間しか来ないから当然なのだが。しょうがないので慧にオロオロ緊急信号をだすと。あきらかに嫌な顔をした後、窓際最後列の席を指差した。そこに机を移動させると隣の席には花束が置いてあった。

「・・・（中原の・・・席か）」

担任の教師が置いたのだから。透にはそれがなぜか味気なく見えた。少し感傷に浸りながら透はゆっくりと椅子に座る。座ったら背もた

れがギシギシと音を立てて壊れたので中原の椅子と交換した。小さかった。

授業開始のチャイムが鳴る。入ってきた教師が怪訝な顔をしたが無視する。教師も教師で透には特別反応せず授業を始めた。いつも盗聴ではあるが授業はちゃんと受けているし、今日もそうするつもりだったので教科書も持ってきた。

「起立、これから数学の授業を始めます、令。」

係か日直か、どちらかわからない柔和な雰囲気少年が号令をした。

おねがいしまあす

慧の声が大きかった気がする、そっちのほうが高評価だからだろう。「優等生め」と、透は寸評する。「着席」の声とともに生徒が座り、授業が始まる。教師がしゃべり始めた。いつもの光景だ

「・・・(ちよつと待て、平和すぎないか?)」

今の一部始終を見て透はとてつもない不信感を感じていた。彼の唯一の参考情報である一年一学期だったら起立した後、誰かが自分の机をけり飛ばしてそのまま刈谷の机の中身サッカーが始まり、慌ててとり返したら、今度は筆箱バレーボールか筆箱の中身を外にぶちまける大作戦あたりが起こり、必死に阻止したら挨拶の後、女子が「先生、刈谷が気持ち悪いです」といって先生は意地の悪い苦笑をし、教室は大爆笑に包まれる・・・くらいあっていいはずだ。

「・・・(何だ?何も起こらなさすぎるぞ、一年の頃のメンバーだっているはずだし、そもそも学年ぐるみでやってたじゃねえか。あ、あれか。シカトだな?なんか急にきたからとりあえずシカトして様子見するパターンか?なるほど、で一週間くらい経ったら襲撃が始まるのか?たまされないぞ、上総のバカが警察に証言したらすぐ帰ってやる!俺は成長してんだよ痛ッ!)」

謀略を巡らしている透の頭に何かが当たった。当たったそれはそのまま机に転がる。

「・・・(けしごむ?)」

よく見ると本体とカバーの間に紙切れがはさんである。教師にバレ

ないように取りだす。

「クラスが始まった時にお前を絶対いじめない約束が作られたの。
涼香に感謝しとけ」

慧が書いたらしい、やたら丸っこい字が並んでいる。「なぜか涼香
に感謝しとけ」が、後から書き足したみたいに少し行がずれていた。
「……」

中原はきつとこの約束を必死になって創ってくれたのだろう。
透は横の机を見た。花束は余計はかなく見えた。

それから幾分か経って透ははつと我に返る。
気づいたら五時間目のチャイムが鳴っていた。

「起立、数学の授業を終わります、令」
ありがとうございますあ

さてどうしよう。鞆には携帯オーディオ機器が入っているが出して
使うわけにはいかないだろう。教師が自分なんかに注意するわけは
ないが、教室の雰囲気から浮くのに気が引ける透は少し思案した。
テストのときは中原といた（喋ってはいない）のでよかったが今は
いないわけだし、唯一話せそうな（話したいわけではない）慧は友
達にどうやって透を教室に連れてきたかという質問をされて可愛く
「脅した」と答えているため近づくとまずそうだしで間が持たな
い。こういうときは寝たふりをしておけばいいと思ったが机がギシ
ギシなって安定しない。どうしようと考えた後、特にいい案が思い
浮かばなかったため、透は休み時間を良い姿勢でイスに座って過ご
すことになった。思いつきり浮いていた。

数分後、

六時間目のチャイムが鳴った。担当教師、2 - 3担任の杉村は挨拶

はしなくてもいいよ的なことを言って、さつさと授業を始めた。杉村は透の存在に気づいたようで、にやにやしなからは濃いヒゲを丹念にさすっついていて気持ちが悪かった。

六時限目は係決めのような。どうやら二回目のように学級委員と数学係（なぜ数学係？）だけが決まっていた。授業直後、たぶん体育教師なんだというあまり整っていない文字で黒板には「学級委員 上総慧・黒部千里 数学係 夏木純太」と書かれた。透は夏木純太には人望があるのかもしれないと分析した。もうテキストに始めてくれという感じで杉村は机にどっぷりと座る。透は「やることなすことイライラするな」という印象を受けていた。教壇の前には自分引張ってきた張本人の上総慧と、細身かつ筋肉質な上背のスポーツ系少年、黒部千里（くろべ ちさと）（名前を見たとき女かと思った）が立っている。

「じゃあ、まず委員会を決めます。それぞれの委員会を希望する人は挙手してください」

仕切っているのは慧、黒板に字を書いているのは千里だ。普通逆じやないかと思っただが、黒板に次々書かれている字が驚異的に上手かつたので納得した。やはり千里という名前にポテンシャルが秘められているんだな、などというバカなことを考えているうちに黒板には保健とか放送とかいう字が書かれて行き、黒板に委員会の名前が一通り揃っていた。

「はい、まず保健委員会を希望する人、えつと友永さんと朝野君ね、じゃあ決定」

あれ？と透は首をかしげた。自分とはちょうど対角線上にいる生徒がしきりに手を挙げている。なんで当てられないのだろう？色々予想してみたがネガティブなことしか思い浮かばなかった。

「・・・（俺「は」いじめないって約束だったよな）」

一人、一人、と係が決まっていく中でその生徒は何度も手を挙げたが一向に指されない。なんだかよくわからなかったが元々、関わる気がないのでそのまま様子を見る。ついに最後の委員会になる。

「はい次、放送委員会、・・・ノブ、あんたいい加減にしろって言うてんでしょ？」

無視されていた少年はいきなり立ち上がる。

「お前、拳手してんだから当たってくれてもいいだろ！！なんだ人権侵害か！？」

それに対して千里が応じる

「指して前でしゃべらせたらテメエは10分でも15分でもくだらねえ話しゃべり続けんだろぅがぁ！それで前の時間に30分も食いつぶしやがって、進行の邪魔だから消えろ！」

「大統領の演説だつてどうでもいい話の一つや二つ入ってるじゃん！」

「どこの大統領だつて「真のサクサク食感」について30分もしゃべらねえッ！つうか、どうでもいいってことをばっちり自覚してんじゃねえかぁ！！」

「おまえにサクサク食感の何がわかんだよ！？大してサクサクもしてねえ癖に！！」

「意味不明な言語を発してんじゃねえ！もういい進行を妨げる奴は俺がぶつ飛ばす」

「うわっ、やんの！？俺のサクサクさんパンチをくらって立ってられんのかなぁ！！」

「詳しく聞きたくなつてくる技だなぁアア！！」

「だろぉおおう！？」

「どんな感じいい！？」

「まず小麦粉でサクサクにしてなぁ！！」

「それからぁぁ！？」

「片栗粉でサクサクにいい！」

「そうするとおお！？」

「軽い口当たりがいいいい！」

「くらつてみたいねええ！」

「召し上がれえエエ！」

「いただきまあす!!」

「二人とも黙れ」

慧が一蹴した。教室の端々でクスクス聞こえる。透はポカンとしていた。

「黒部、悪ノリするなって言ったでしょ」

「えーっ! だってサクサクのくだり楽しかったし、」

「もう少しで機動戦士サクサクさんのオープニングに入るところだったのにー」

横槍を入れるノブを慧は思い切りならみつける。透は「心配して損した」という感じに溜息をついた。

「黙れノブ、土に還すわよ」

「おまえってホントに土に還しそうだよな」

「さて、杉村の馬鹿がキレないうちに進めようぜ」

「また悪ノリしたらあんたも土に還すわよ」

「わかってるよ。な、ノブ?」

「黙れ、おまえを蠟人形orサクサクにしてやるうかゲフツ!!」
ノブの鳩尾に一発入った。流星のお調子者も、ぐったりして席に着く。

「……(帰りたいたい)」

クラスになじむ気のない透をよそに係はどんどん決まっていた。はやく帰れると思うって窓のほうを見ていたら慧が何か言った。

「刈谷、お前係なんにするの?」

俺も? もっとも、こういうときは無視すればいいんだ。そうすればそのまま過ぎていく。と思っていたが、いかんせんクラスの視線が自分に集まってしまった。こうなったら無視はできない、が緊張してしゃべることもできない。

「……(どうしよう、そのツ、あの)」

生徒たちは早くしろよという目でこっちを見てきた。これでは去年の二の舞だ。

「あ、あの、あ、あ、」

「早くしなさい！」

「あ、あの、その」

どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう

頭がごちゃごちゃでまず何を喋ったらいいかもわからない。

「あ、あま、あ」

余ってるやつでいい。そう言おうと思ったが言葉にならない。

「あ、あの、」

「甘いのがいいです……！」

ノブによる突然の奇襲。するとなぜか勝手に口が動いた。

「ち、ち、ちげえよ！余ってるの！あ、甘いつてなんで係決めでス
イーッ頼むんだよ……！」

そこに千里が突撃してくる。

「刈谷ナイスツツコミ！でも若干、噛みかけだぞ！」

わっ、とクラスに歓喜が起こった。

おや？なぜかクラスで一体感が生まれている。それ自体は不思議でもなんでもない問題なのはその中に自分〓刈谷透が入っていることだ。こんなはずはない。こんなの自分じゃない。でも、でも

「（あれ、ちよつと………楽しい……）」

こんな感情初めてかもしれない。この空気の中に自分がいてもいいのか？いいのか？

「余ってる係ってあと理科係だけなんだけどそれでいい？」

不思議な表情をしていると慧が事務的に聞いてきた。

「う、……うん」

限りなく嫌だったが一応承諾した。そういう気分だったのかもしれない。

「終わったか〜じゃあ先生の話すぞお」

杉村のありがたい話も不愉快な部分も一切頭に入らなかった。心がうわついていた。

1話その1・3「いつもと違う日々3」

「明日も来るの？」

慧が聞いてきた。放課後、もう夕暮れで窓から赤味が勝った春の光が差し込んでいた。部活に所属していないし、帰ってもすることがない透、サボる気満々のノブ、彼を連れて行こうと頑張っている千里、学級委員の仕事を片付けている慧、日直の仕事であるため残っている校倉京子（あぜくらきょうこ）の五名は教室に残っている。透以外はいつものメンバーらしい。やっぱり来ないほうがいいのだろうか。今日にも慧は警察に透の無実を立証するのだろうか。もう来る必要はない。

「わ、わからない」

透は携帯オーディオ機器をの表面をいじりながら聞こうか聞くまいか、もじもじながら言った。きっと、本当は行きたいのだ。でも図々しすぎやしないか

「来いよ！」

ノブがペンをくるくる回しながら言った。からつとした笑顔が半分以上くらい夕日によって輝いている。少しまぶしそうだ。千里はそのペンを取り上げてくるくる回す。

「あつ返せよ」というノブの声を「元から俺のだ」と制した千里は少し真剣に

「正直、来たほうがいいと思うぜ、前、おまえいじめてた北本たちは学校来ないし、そっちのほうが喜ぶだろ？・・・中原の奴」

「・・・・・・・・」

ノブですら黙る。

「・・・・・・・・（そついえばもういないんだな）」

透は春の光の差し込む窓を見た。千里はしまったという感じで視線をそらす。慧は下を向いてしまった。ノブは千里のペンを奪って今の気持ちをこまかすように回した。

「過ぎちゃったことはしょうがないでしょ、ほら、顔あげろ」

校倉がそういった。とくに表情には表れていなかったが唇が細かく震えていた。強がってるようだ。どうやら京子はこのグループのお姉さんの存在らしい。

「帰る」

そう言っただけで慧は教室をすたすたと出て行った。背中がさびしい感じがした。その後ノブと千里は部活に行っただけで、教室はいまだに窓を眺めている透と日直用のノートを持った京子の二人になった。夕日と影の境界がにじむ。頬杖をしたままぼんやりしている透に京子が少し慣れない感じでしかしはつきりとした口調で、

「刈谷くんさ、涼香のこと好きだった？」

「ん？は、はっ、はい？」

寝耳に水状態の透だったが京子の真剣な表情を見てさらに焦る。

「い、や、そのいい奴だけどその好き、とか、そ、そういう、え、あ……え？」

これだけ焦っているのに自分が現在形でしゃべったことが気にかかった。京子の横に見える太陽は山に隠れるために少しずつ沈んでいた。

「あの子は好きだったと思うよ」

「えっ!？」

自分のどこに？パニックで目の焦点が合わなくなりだした。どこかで衝突事故の起きたような「がしゃり」という音がした気がするが、きつと気のせいだ。

「だってそうでしょ、好きでなきゃ君なんかそんな親切にならな
いよ」

「なんか」が気になったが事実だから仕方ない。

「知ってる？君が教室でやった次の日からあの子みんなにとおるくんに謝りに行くってずっと言ってたのよ。そしたら自分までいじめられだしてさ、いじめが止まったのなんてほんの最近で、それまでずっと靴隠されたり、教科書ビリビリにされたり、それで

もずつと言つてたのとおるくんを教室に戻そうつて」

それは知らなかった。たしかに中原はずつと笑顔だった。でもそれは自分のために作つてくれていた笑顔だったのだ。何なんだ自分は？透は複雑な表情で京子を見た。

「・・・」

声が出ない。何も言えない。自分が平穏と思つていた時、中原は闘つていたのだ。ずっと、ずっと。目のあたりが熱っぽくなり、鼻先がつんとして涙腺が緩んでいく。熱い液体が目元から頬を伝った。

「泣いてんの？バカみたい」

「だって、だって」

その時、何かが切れた。思えばさっきの事故も本物だったのかもしれない。

「泣いてんじゃないよ！あんたがどっかに逃げてのうのと生きてる間、あの子はあるたのために闘つて、ボロボロになって、あんなにかよらずつと涙流してたんだよ！あんたに無く資格あんの！？」あきらかな怒り、怒っている。自分の友人のために本気で怒っている。あの時の慧と同じ表情だった。ただ、感情はもつと激しく、強い。圧倒的な感情に押しつぶされるのにほんの些細な抵抗をするように透が

「でっ、でも」

「だから、」

京子が制す、よく見ると目元が緩んで流れた涙が夕日に反射してきらめいていた。少女はさらに激しい感情をぶつけてくる。

「だから、あんたはあの子のために生きるのよ！クラスじゃあの子が作った約束で守られてるけど学校にはまだあんたが大嫌いだって子がいくらでもいるよ！でも、その子達に立ち向かつて、せいぜいボロボロになつて、あの子のため生きるのよ！それが「つぐない」つてモンでしょ！？」

数秒の沈黙、教室には少女のせえせえという息だけが響いていた。透はボロボロと泣き崩れる。情けない。情けなかった。目元の涙を

ぬぐった京子はエンジンが切れたように静かになり、吹っ切れたようにいつもの表情に戻って、

「じゃ、私行くから」

と言って出て行った。少年がひとり残された教室は恐ろしく静かだったが、透の心には口では言い表せない巨大で激しいなにかが渦巻いていた。

中原のために生きる。自分になにができるのだろうか？

「・・・(でも)」

透はぽっかりと、虚ろな表情で教室を出た。外から救急車の音がしたから事故があったのだろう。

1話その2「灰色」

校門を出た透はおぼつかない足取りで歩いていった。いつもなら帰って速攻で夕飯を食べ、風呂に入り、さっさと寝て深夜の新聞配達に備えるところだが今日はそんな気分にならなかった。色んな事がありすぎて、頭の許容量がパンクしてしまいそうだ。なんだかどうにもならなくなってきた。太陽はもう沈むにつれてさらに激しく燃えている。バカみたいだ。じっと見ようとしたがまぶしすぎて直視できなかった。事故が起こっているところに野次馬にでも行ってみるか？と柄にもないことを考えてみる。なんだかいつもの自分ではないような気がしたがもう生活サイクルなんかどうでもよくなっていた。

事故現場にはたくさん人が集まっていて、学生も多かった。どうやらトラックが、学校の民家の外壁に衝突したらしい。透はおや？と思った

「・・・？・・・！！」

予感はず信に変わる。その事故現場は、トラックは、昨日の深夜に彼が見たものと全くそのままその通りだったのだ。たまたま見えていた車のナンバーも一致している。

「・・・（おかしい、おかしすぎるだろ！？）」

すぐに振り返って帰路に就く。おかしい、おかしい！深夜のあの『音』にしる、たった今起きたデジャヴ（こう使うのかどうか透にはわからなかったが）といい、なんだかおかしすぎる。とにかくもう家に帰ろう。透は今「何か」に恐怖していた。ただ、その「何か」が何なのか、それがわからない。だから怖いのだ。

もう日は沈みかかっている。これでまた何かあったらシヤレにならない。さっさと帰ろう。十字路を右に曲がると、

「ハイ、その坊やSTOP、」

とトーンもテンションも高い声が聞こえた。曲がった先、つまり帰

る進行方向に見知らぬ男がいる。それも一人ではない。ざっと五、六人。先頭に立っている男は場違いなド派手アロハシャツ、ほかの男が黒服なので更に際だって見えた。自分に話しかけているのはそのアロハシャツだった。二十代後半くらいだろうか？ほかの男たちは何となく怖かったがこの男からはそれとはまた違う明らかな邪悪さが伝わってきた。道端で話しかけられたら絶対に相手にしてはいけないような「イッてる」目をしている。透は恐怖のあまりその場で固まってしまった。アロハシャツは「イッてる」目をむき出して少しもリラックスできない気持ち悪い笑顔で話しかけてくる。

「坊や、ちよいとお兄さんたちと来てくれるかな？理由はわかるだろ？」

わかるはずない。自分が何をしたんだ？ふるふると首を振る。

「いや、君に能力者の反応があつたんだよ。この黒服のお兄さんの能力でさ、」

能力者？なんの事だ。一向に話が見えてこない。こういうときは相手の反応を待つに限る。透は無視を決め込んだ。性格には怖くて何も言えなかった部分もあるのだが。アロハシャツはあまり慣れていなかったたらしい笑顔をやめた。目じりが若干、震えている。

「おい坊や、聞こえてんだろ・・・なあ？・・・訊いてんだよこのクソガキがあー！！」

（関わっちゃだめだ）と透はこのよくわからない集団を勝手に不審者と決めつけてその場から全速力で逃げる。あのぶかぶかのアロハシャツを着てるやつはともかく後ろで澄ましているいかにも鍛えてそうな黒服から正攻法で出逃げ切れるとは思ってない。とすれば

「・・・（学校が近いんだ、人混みの中に突っ込めばあいつらは手出しができない！）」

と左折して学校の隣に群がっている野次馬の群れに向かってダッシュする。事故現場だから警察だっているはずだ。その距離ほんの50メートル、いける！

「どうしますMr・Flauros、追いますか？」

「様つけるって言うてんだろ？消されてエのか？」

「いえ、Mr. は敬称ですから」

「はあ？意味わかんねえよ？」

「つまりMr. って言えば既に様ってつけてるのと同じということ
です」

「なんだよ、じゃあ最初っからそう言えよ。俺がバカみたいじゃね
えか、このバカ」

「了解、それで追いますか？」

「いや、いい。俺がやる。」

アロハシャツは不気味に笑う。

「せいぜい死なねえようにしてほしいなあ、ま、死んでもそれまで
だが」

残り距離にして15メートルくらいになった。助かった、「おーい」
と野次馬たちに呼びかける。彼らはいまだに事故現場でのうのうと
見物をしていた。何人がこっちに気付く。

全速力でそこまでたどり着く。野次馬の一人、小太りのおじさんは
驚いた顔だ。

「どうしたんだ？」

「ふ、不審者が、出たんです」

息を切らしながら今まで起こったことを詳しく話す。これで安心だ。
しかし透はある異変に気付く。

「・・・（なんかおかしいぞ？）」

野次馬たちが怯えた眼でむこう、正確には透が逃げてきたほうを見
て騒いでいる。不審者たちが追ってきたのか？と思ったが、不審者
を見る目じゃない。なにかこう・・・そうテレビで津波とか地震が
来たとき逃げまどう住民のように巨大なものにおびえた表情、

「なんだ・・・あれ？」

野次馬の一人が震えた声で指を指す。透もそれに合わせてそちらを
見た。

「・・・(なんだ・・・あれ)」

さっきまで自分が走ってきた、ちょうど不審者たちとばったり会った曲がり角のあたり、灰色の液体のような固体のような、堅さもよくわからないものが道幅いっぱいに広がり、さらに屋根の高さくらいまでうねりあげている。電柱がドロドロに溶けているみたいだった。しかもそれはまるで生き物のようにうごめいている。正体不明の巨大な何かに思わず足がすくんだ。

怯えきつた小太りのおじさんが引きつった声で

「く、く、来るぞオツ！」

その瞬間、ドロドロの塊はすさまじい音を立てて津波のようにこちらに押し寄せてきた。不思議なことにその灰色の津波は民家の外壁を巻き込んでさらに巨大化する。もしかしたら材質が一緒なのだろうか？

しばらく茫然と眺めていた透だったが、はっと我に返ってあたりを見渡す。皆まだパニックがとけていないらしくその場にかたまっている。なんとかしないと、

「に、逃げろっ！」

ダメだ、聞こえていない。さっきまで自分がそうだったように茫然と灰色の津波を眺めている。このままじゃ自分まで死ぬ。透は少しパニックになりながら走りだした。

その数秒後、透が見捨てた野次馬たちも我に返りあたりを見渡す。だがもう遅い。灰色の津波は近くの外壁を飲み込んで肥大化し、彼らを軽々と飲み込んだ。

灰色の津波は激しい速度で野次馬や民家を巻き込んで、そして、止まった。いや、固まったと言ったほうがいいだろう。その固まった灰色の道をさっきのアロハシャツと黒服達がゆっくり歩いてきた。透の見積もりは外れて彼らは全部で7人、その先頭に立つアロハシ

ヤツはさっきの不気味な笑顔のまま、少し不格好に歩く。

「素晴らしいです。Mr. Flaurors、流石はソロモンの柱と
いったところですか。」

「勝手に品評してんじゃねえ。で、何人殺った？」

「私どもにはわかりかねますが・・・大体二十人くらいかと」

「そうか、とアロハシャツは上機嫌だ。黒服はさらに続ける。

「それよりも重要なのはさっきの子供じゃないんですか？」

「ああ、そっぴやそうだったな、で反応は？」

「残念ながらありませんね」

「へえ？あのガキちゃんと逃げたんだ、中坊にしちゃ上出来だな」

「それでこれからどうします？追いますか？」

「それさっきも聞いたセリフだな、まあいい、3・3に分かれる。

半分は俺と一緒にガキの家周辺、残りはガキが逃げたっぽい東側を
探索だ」

「死体処理は？あとそこら中の壁を破壊しまくっていますか？」

能力の性質上、民家の外壁は抜け落ちたようにすべて無くなってい
て、家は灰色の津波に巻き込まれて半壊している。その上、彼らが
歩いているこの灰色の道には約二十人が飲み込まれている。道には
所々、不気味な凹凸が浮かび上がっていた。

「ああ、それなら一瞬だな。さっさと道渡れ。」

黒服達が少し急ぎ足で道を渡る。彼らが渡り切るか渡りきらないかで
灰色の道が生き物のようにうごめいて灰色の川と化す。さっきとは
違い、獲物に近づく蛇のようにゆっくりだった。もう動かない「人
間だった」肉の塊がドロドロの川から見え隠れしている。灰色の川
は巻き込まれた壁だったところに満ち渡って行く。そうしてそれが
もとの壁に戻る。

「一丁上がり。壁は俺の能力で完璧補修。死体と一緒に壁に埋めち
まえば気付かれねえ。壊れた家に関しては・・・どうだっていいな。」

アロハシャツは自分が直した壁を上機嫌な様子で眺めた。

黒服の一人がつぶやいた。

「これが、ソロモンの柱の一人、Flaurorsの能力、Earth ruler（地の支配者）か、相も変わらず幹部の能力は規格外というか・・・化け物染みている」

アロハシャツ「Flaurorsは「イツてる」眼で黒服を見る。

「終わったぜ、とろいGenomゲノムを一人巻き込んだがな。今頃、ここのご近所の皆さんと一緒に壁の一部だけ。それに関しては文句ねえよな下級能力者の諸君？」

そういえば野太い断末魔が聞こえた気がする。そんな使えない同僚のことはどうだっていいほかの黒服「Genomは「もちろん」という感じで軽く会釈した。

「じゃあ一人いなくなっちゃったから、二人俺についてこい。さっさとガキ捕まえんぞ」

透は住んでいる住宅街のほうから少し離れた糸川北東地区でとぼとぼ歩いている。日はもう沈んでいて、暗い闇が少しずつ街を飲み込んでいた

悪夢のようだ。パニック状態でよくわからなかったがああの調子だと自分以外はあの灰色の津波に巻き込まれてしまったんだろう。自分があそこに行ったから死んでしまった、自分が殺したんだと、嫌な罪悪感が付きまとっていた。鞆を学校においてきたのをふと思い出した。どうせ今さら取りに帰れもしないだろう。非日常的すぎる。だが、受け入れなければ。唇を強くかみしめる。さてどうしよう、やはりあれは自分に用があったんだろうか。そもそも能力って何だ？透はそういう類の漫画を意識的に読まないようにしているのだから知らない。やっぱり自分に用があったんだろう。とすれば絶対に自分を追いかけてくるはずだ。とりあえず状況を整理してみる。あとから気づいたがああの灰色の津波の正体はたぶんコンクリートだ。

不審者たちの一人、(きつとアロハシャツだ)は、コンクリートを液体のようにして(どうやるのかは分からないが)操ることができるといい。にわかには信じがたい話だが受け入れるしかない。透の住む糸川氏は住宅地が多いから相対的にコンクリートだらけだ。あいつが本気を出したら何万人も人が死ぬだろう。自分が正義の味方を気取るつもりはないがその事態は避けたいといけな。だから透は警察署を目指して歩いてきた。一番近い糸川東警察署はここからだいたい1.5kmくらいだから何とかあいつらに気付かれずにいけるだろう。警察なら何とかしてくれる。というよりそう思わないとやってられなかった。

人通りの多い所に出て人ごみにまぎれようと思ったが、自分が市街地などに出て奴らが気づいたら絶対躊躇せずにあの灰色の津波が人々を無差別に飲み込むだろう。もしかしたら自分が居ようが居まいが手あたりしだい殺しまくるかもしれない。普通の神経ではどう考えても無理だがアロハシャツの「イツてる」目ならやりかねない。それは避けるべき事態だ。だから透は糸川北東地区の、通称「廃ビル街」を歩いてきた。かつては数多くの商社が存在していたがこのところの経済不況だったり、市の中心部が移ったり、その他さまざま理由で今はもう廃れてしまっている。景気の良かったころにいろいろな会社が半ば強引にビルを建てたので裏道が入り組んで不規則になってる。ここなら人もいない上、入り組んだ道も多いから隠れやすい。もう少し歩いて体力が回復したら走ろう。体育の授業も部活もない生活を送っている透に全力疾走はきつかった。膝が若干痛む。こんな時自分のポンコツ加減を自覚する。さっさとこんなくだらない悪夢を終わらせて明日も学校に行こうと、ビルを左折する。

黒服達がいた。

人数は三人。距離は20m以上あったがどうやら気付かれたようだ。

慌ててダッシュで引き返す。当然追ってくる。何とか入り組んだ道に飛び込んだ。すぐに右折する。廃ビル街は不規則にビルが並んでいるので曲がり道が多い。黒服達は透を見失ったようだ。少し息をつく。おそらく三人で追ってくるのでは無くそれぞれ分かれて追い込んで挟み撃ちを狙う作戦だろう。幸いなことにアロハシャツはいないらしい。かといって市街地に出られるわけではないが灰色の津波の光景が目には焼き付いている透にとつてはあいつがいないことで心に少し余裕ができた。しかし予断を許さない状況であることは間違いない。黒服達はこの近辺の地理に詳しくないだろう。隅まで知り尽くした廃ビル街なら十分巻ける。そう思つて右折すると15m位のところに黒服がいた。いや「居た」ではなく現在進行形でこちらに「走つて」きている。しかも右手に握られている黒い塊は……銃だ。

その飾り気のない黒い塊に心臓を掴まれるような恐怖を覚えた透は来た道を一目散に逃げる。黒服は曲がり道のところでしたっかりと構えて三発発砲した。その音は映画で聞くような火薬のはぜる音ではなくは無く低く沈んだ重々しい金属のこだまだった。弾丸はさまざまじいスピードで透に吸い込まれる。一発目は耳をかすめる。耳元で空気を切り裂くような音がして耳に響いた。二発目は壁に当たつて砕ける。そして三発目は、透の左手をとらえ、貫通した。

「うぐっ……」

手のひらに激痛がはしる。痛みで倒れそうだったが手のひらを無理やり握つて泣きそうになりながら全力で道を横切る。拳銃の反動で少しのけぞっていた黒服は「逃がすか」と追つたが少年はいなかった。どうやら見失つたらしい。血痕もない。とつさに手をかくまつたのだろう。「中学生にしては冷静な対処だ」と黒服はすこし感心しつつあたりを見渡す。そこは曲がり道だらけの入り組んだ場所で普通、透がどこに行つたかなんてわかりっこなかったが、普通の人間でない黒服にはあの少年がどこに行つたか大体的見当がついてい

た。

1話その2-2「死にたくない」

透はとあるビルのむき出しになったコンクリート壁に背を向けてへたり込んだ。四階建ての二階だ。普通敵が来たら逃げにくいので一階にしておくべきだが、だから敵も自分が二階にいるとは考えにくいだろうという裏をかけた作戦のつもりだ

自分は銃で「撃たれた」のだ。信じたくなかったが抑えた左手からは赤黒いものが流れ出て、腕を伝い肘のあたりで雫となり、ぼたりぼたりと床に落ちていてその液体の噴出口から体全体に鈍く激しい痛みが走っている。体中から脂汗が噴出して指や関節の間がひどく粘っていた。どうしよう？黒服達は銃を持っていて。ここで手負いの自分が飛び出して行つて見つかつてもう一度逃げ切る自信はない。あいつらも必死に透を探し出してそのうちここまで来るだろう。それまでにこの廃ビル街から抜け出して糸川東警察署までたどり着くなんて絶対無理だ。でもやるしかない。自分にあのアロハシャツのような力はない。あつたとしても戦いたくない。抑えた手をどかして酷く不規則な形をした銃創をみる。血まみれの穴から真っ赤に染まった肉が見えた。頭や心臓を撃たれたら痛いじゃ済まない。怖い、足が震え言い知れぬ冷たい恐怖が足元からすり上がってくる。

「・・・（死にたくない、死にたくない、死にたくない）
カタンという音がした。」

「黒服だ！」すぐに気付いたが「逃げないと」と理屈ではわかるが恐怖で足が動かない。

「君がそこにいることはわかっている。抵抗せずこっちに来てくれ」
「・・・」

反応しちやだめだ。ハツタリかもしれない。透は唾液を呑み込んで体を深く沈め、右手親指をかむ。歯がガチガチ鳴った。強く噛み過ぎて血が出てきた。

「嘘だと思つたら、そうだな・・・爪なんか噛んでないで左手の保

護をしたほうがいい」

「・・・！（こっちの動きがばれてる！）」

「Skill scouter（能力偵察者）、それが我々ソロモンの下級能力者戦闘員Genomの能力だ。三人集まれば半径数十メートルの範囲の能力者の行動が手に取るように分かる。とはいえ一人ではほとんど何の役にも立たない能力だがね、さあ降伏してくれ。」

黒服の声は壁に反射しまくってなんだか無駄に大きくぼやけたものだった。なんだかよくわからないが少し逃げたくらいではすぐ見つかってしまうということだろう。絶望的だ。

「お、俺を、どうする気・・・だ？」

怯えながらアメリカ映画の三下みたいなセリフを吐く。思ったより声が出なかったが聞こえていたのだろうか。

「聞きたいことがある。目的が達成できれば特に何もしない」

本当だろうか？どうも嘘くさいが黙っていたらきつと発砲してくる透はむつくと立ち上がり左手を弱弱しく押さえながら声のするほうへ歩く。足の震えが止まらなかった。

黒服は二階と一階をつなぐ階段で三人とも待機していた。黒服Cが自分の後ろに回り込み、黒服Bは階段を降りて行き、黒服Aは自分に近づいてきた。

「質問を始める。薬をどこで手に入れた？」

な、何の・・・こと？」

「とぼけても無駄だ。どこで手に入れたかを言え」

そんな物知らない。薬って何だ？彼らの格好から察するに麻薬の類だろうか。ここ最近、何ならこの半年ぐらい、透は風邪薬すら買った覚えがない。それなのに黒服達は自分が薬をどこかで手に入れたと決めつけている

「ほ、本当に知らないんだ、」

「早く言わないと撃つぞ。さっきは左手だったから今度は右手か？」
そう言っってポケットから黒い塊を出し、発砲するために安全装置を

外しだした

「ま、待って、ま、ま、まず薬って何？」

黒服は少しあきれた声でさも面倒そうに

「Elixir^{エリクサー}、能力発現剤だ。おまえから能力者の反応がする以

上、おまえがそれを手に入れて服用したとしか考えられんだろう？」

「そ、その、そんなもの本当に知ら、うぐあー！」

銃声。弾丸が透の左腕に突き刺さる。どうやら貫通したらしい。痛みで立っていることもできず、その場に倒れこんだ。黒服は文字通り見降ろしながら

「一応二発とも左だ右手は動くだろ？ さつさと言わないと脳天にぶち込むぞ」

「ほ、とに、しらない」

立ち上がれない。痛みで意識が飛びそうだ。何で自分がこんな目に会ったんだ？ 潰えそうな意識の中で黒服達が何か喋っていた。

「おい、こいつもしかしたら本当に知らんのかもしれんぞ」

「では、何で反応しているんだ？」

「誤作動かもしれない。たまに小動物なんか反応するだろう？ あれだ」

「あれは小動物が何らかの能力を有していると考えられているのだらう？」

「小動物は薬など飲まない。あれは天然のものだからな」

「こいつが天然物の能力者ということか？ 人間では例がないはずだ」

「いや、欧州のほうではごくまれにそういうものが存在するらしいが、発現後100%の確率で能力が誤作動するから簡単に見つかって全員が全員その国の能力者管理局のお世話になっているらしい。しかしこいつはそう言った兆候もない」

「そうなるとやはり我々の能力の誤作動か？」

「どうやらそういうことらしいな」

よくわからないが自分の疑いが晴れたらしい。助かった。

「で、どうする？」

「それは、しょうがないだろう」

「組織の事、そもそも能力者の存在に気付かれた時点で一般人には消えてもらわねばなるまい。そういうことだから残念だが少年、君には死んでもらう」

聞いてないぞ。急に意識がはつきりする。状況がまったくつかめな
いが自分を殺すことが決定したのはわかった。黒服は外しっぱなし
だった銃の安全装置を一度締め、もう一度取り外す。無駄な行為だ
が彼なりの流儀があるのかもしれない。黒服はもう引き金を引けば
弾の出る人殺しの道具をゆっくりとこちらに向けてくる。銃口の闇
に吸い込まれそうになる。

「た、助けてください」

透は五歳児みたいな声で命乞いをした。涙がボロボロとこぼれてい
る。

「残念だがそうもいかない。堪忍してくれ」

「いやだ、いやだあ」

「10秒やる。好きな姿勢で死ぬといい。流石にそんな無様な体勢
は嫌だろ？」

さすがにもう悟ったのか。透はゆっくりと立つ。顔からは血の気が
引いている。涙がほおを伝ったが目からはもう流れていない。蜘蛛
に捕食される前の小虫の用におびえていた。

「たすけてください、助けてクダサイ、お願いします。」

黒服は憐れむような眼で透を見る。ただしその奥底には喜びが満ち
ていた。

「残念だったな。恨むなら自分の運命でも恨むといい。では数える
ぞ、9」

瞬間、ガタガタ震えている少年が急に静かになった。これに不信感
を覚えたのかほかの黒服達も銃を構える。透はどうにかして逃げる
方法ではなく、覚悟を決めて死ぬ準備をしていた。半ばあきらめの
ような状態だ。一つ一つ整理してみる。家族、姉はきつと一人でも
やっていけるはずだ。新聞配達は自分の生活費を捻出するだけで精

一杯だったしこれで負担も減るだろう。保険に入っていたはずだから死ねば金が入る。後は特に自分が死んだからといってなんということも無いだろう。安心だ。

「8、」
友達は、いない。今日しゃべったやつらが友達だったかどうかは彼ら自身に聞いてみないとわからないが、友達とは思っていないはずだ。別にいい。黒服Bが時計をいじりだした。何やら高価そうだが、土埃にまみれている。

「7、」
中原は友達なのか？透の心に何か引つかかった。思えばどうなのだろう。ただプリントを届けてもらって一緒に登下校するだけの関係だったか。あれは友達と言えるのか。いや、厳密には過去形で友達だったか。

「6、」
どちらにせよあいつは死んでしまったからよくわからない。死んで天国という場所があったらそこで聞いてみよう。さすがに地獄に落ちるほど悪いことはしていないと思う。

「5、」
あれ？何か忘れている気がする。今日は重大なことが色々ありすぎて一つ一つのことのがはつきりしない。なんだったつけ？こんな中で結構冷静になれる自分に我ながら感心する。人というもののは得てして死にそんな時こんなにも落ち着いているものなのか。もっとも体験がこれ一回だけだからよくわからない。

「4、」
そうだ、教室にカバンを置いてきた。携帯オーディオ機器や盗聴器その他諸々入っていてあまり人に見せたくない。それが取りにいけなかったのが非常に心残りだ。ああ、非常に残念だ・・・違うぞ？ほかの事だもつと違うこと、もう少し前の事のはずだ。

「3、」
確か、教室だったはずだ。放心状態で教室を出る少し前、教室で涙

を流しながらこつちをまつすぐ見ていた京子の顔が思い浮かぶ・・・
思い出した！

「2、」

「あの子のために生きる」だ、そうだ、自分は彼女、中原涼香のために自分は生きなければならぬ。死んではならない、生きなくてはいけないのだ。

途端に目が生気を宿している。目だけではない、手や足、全身に血液がめぐって体が沸騰しそうだった。ただし、生きるというのは死への恐怖と隣合わせだ。足が震えだす、汗が噴き出してきた。左腕全体の激痛が戻ってきた。でも、死ぬよりましだ。絶対に生きることから逃げちゃだめだ。

「1、」

「死ぬのはいやだ、死にたくない死にたくない死にたくない・・・死にたくない、」

黒服は驚いた。死ぬ間際に少年が怖がり出した。いや、そんなちやちな物じゃない。少年は体全体をガタガタ震えさせながら、映画の絶対死ぬ奴が吐くネガティブ極まりない言葉を口にしながら、強いまつすぐな目で銃口を、自分を思い切り睨みつけていた。

闘っている・・・目の前にいる敵と、死と、生きるために。

「0だ、君の土壇場での勇氣に敬意を表するよ・・・さらばだ、勇氣ある少年」

黒服は引き金に手をかける。その表情は自分が引き金を引けばこいつは死ぬというある種の優越感のためか余裕がある。

「・・・（死にたくない、死にたくない、死んじゃだめだ・・・死んじゃだめだ！）」

引き金が引かれれば死ぬはずなのに透は死なない自信があった。根拠はない。いや、自信というより生への意地、執念に近いものだった。

黒服は引き金を引く、瞬間、弾丸がすさまじいスピードで透めがけて発射される

そうしてその弾丸は透の脳天を直撃、

する前に空中で砕けた

砕けた弾丸は細かい破片になって飛び散りそのいくつかが透の頬をかすめる。少し血が出たがそんなこと気にしない。

「・・・は？」

何が起こったんだ？銃弾は確実に自分の頭をぶち抜いて今頃、脳髓ぶちまけてるはずなのに、その弾丸は勝手に砕けて自分は生きている。不可解。

一瞬少し戸惑っていた黒服がもう一度発砲する。しかしまた弾丸は透に到達せずに砕ける。ただ、今度は「キィイン」という金属音が響いた。何の音だ？ほかの黒服も発砲するがすべて謎の金属音に阻まれ、無残に砕け散った。弾を撃ち尽くした黒服が悟ったように言う。

「なるほど。これが君の能力か、大方、銃弾を自動捕捉して破壊するといったところか？それじゃ銃殺できない。多少痛むかもしれないがしょうがない。殴り殺す」

そう言つて3人一緒に飛びかかってきた。黒服達の一步一步によってコンクリートの粉が吹き出す。急の事に対応できない透はとっさに防戦一方のボクサーのような、それより数段稚拙な防御態勢をとる。黒服の拳が彼の左腕を襲う。普通は手負いの左腕がさらにぐしゃぐしゃになるところだが、それどころか

「ブツン」という音を立てて黒服の右腕が吹き飛んだ。

厳密には手首の下12センチくらいまでがもげて2mほど吹っ飛ぶ。思わずその場にうずくまった黒服Aを飛び越えて階段で待機してい

た黒服Bが強烈な回し蹴りを繰り返す。これも例によって透の体が吹き飛ばされるのではなく黒服のほうの左足が「ブツリ」という音を立ててちぎれ横3mくらい吹っ飛んで蹴りを繰り返した黒服はバランスを崩して倒れる。後ろに回っていた黒服Cは何もしない。透の一步手前で立ち止まって戦慄していた。その目から、はつきりと戦う意思がそがれていた。黒服Aはもげた右腕を抑えながらあきらめたように言う。

「参ったな、降参だ。まさかそんな凶悪な能力者だったなんて・・・うん、降参だな。どう考えても勝てる気がしない。さっさと殺してくれ。こう見えて結構痛むんだ」

透には今起こったことが全くわからなかった。目の前に広がっている惨事を自分が起こしたということにも自覚はなかったし、その原因もつかめていない。ただ、それよりも、もっとわからないことがあった。

「な、なにも、死ぬことは、な、ないじゃないですか」

何？黒服は3人ともあきれ顔だ。黒服Aは、ばかばかしそうに言う。（良く考えるとずっと喋っていたのはこいつだったし結構喋る性質なのかもしれない）

「君は意外と自分が置かれた立場が分かっていないようだ、我々はマフィアだぞ？国際的な能力者組織^{ソロモン}Solomonの正規戦闘員だ。人を殺したこともある立派な犯罪者だ。それに情けをかけるのはむしろ法律違反だ。何なら我々を殺して警察署に行っても君の正当防衛は認められる。君に殺さない理由などないさ。あとね、この世界では敵に情けをかけられると結構恥なんだよ。さ、わかったら殺せ」

「い、いやです。」

透が少し唇を噛みながら言う。黒服Aは少し真剣な表情をした。

「殺すのが怖いのか？」

当たり前だ。一般人が人を殺すのが怖くないはずない。しかしあまりにも鋭い口調だったので透は口ごもってしまう。

「君はまだ、自分が普通の人間だと思っっているらしいがとんだ勘違いだ。君は普通の人間なんかじゃない。能力者だ、しかも「柱」級の強力な能力を有している。直に我々のようなサーチ能力を持った Genom が来るだろうし、それと戦うことになる。それで人を殺すのが怖い？ 甘えないほうがいい。殺さなければ殺されるぞ」

それは殺す殺されるの世界にいた人間こそが放てる眼光だった。それは狩りを糧としている凶暴な肉食獣にいくら共通点を持つようになまなざしだった。しかし透は物怖じしない。(喋り方が不自由なのは恐怖ではなくコミュニケーション能力の不足だ)

「お、俺は、そういうことを言いたいんじゃないんです」

黒服は「何をくだらないことを言っているのだ」という感じで子供の戯言に動じない。

「では聞くが、君の言いたいことは？」

透は一呼吸おいて言い放つ。勇気を振り絞った。

「あ、あんたらは・・・生きたくないんですか？」

黒服は意外そうな顔をする。

「そりゃあ、生きたいが」

「じゃあ何も死ぬことないじゃないですか！ 僕がここで何もしなければあなたたちは生きてられるんですよ！」

「生憎だが平和論は好きじゃない」

「そんな大層なもんじゃないですよ！ ここで生き残れたらあなたたちは組織で出世できるかもしれない。もっとほかの可能性が出てくるかもしれない。なのにそのチャンスを見すみす逃すんですか！？ プライドの前にまず生きることでしょ！ あなたたちは自殺者を見て哀れに思わないんですか？ わかったらとにかく生きてください！！」

「・・・(うわっ、俺マファイア相手に怒鳴っちゃったよ。どうしよう、後で殺されるのか?)」

久しぶりに人が入ったらしいむき出しのコンクリートのビルはどこどころコンクリートが風化してさらさらという音を立てていた。

しばらくすると黒服Aがなんだか不抜けたような表情で問いかけた。

「どうする？この少年はどうやら我々を殺さないらしい」

「じゃあ自殺か？それは御免だな、我々の恰好だとまるでサラリーマンだ。新聞にいつもの社会現象みたいに載るのは勘弁してほしい」

「すると、どうなる？」

「敵に返り討ちにあつたからといって治してくれるような組織には所属していないぞ」

「病院のお世話になるしかないな」

「保健証は偽造だがまあ、なんとかなるだろう」

「そんなことしたら組織に殺されるぞ」

「足を洗うしかないな」

「そういうことだな」

なんだか向こうの世界の話はよくわからなかったが意見がまとまったようだ

「というわけだ少年。我々はシャバに戻る。幸いなことに戸籍等は偽造してあるし問題ない。その第一歩として今から病院に行くから私の肩を持ってくれ。」

とおるは黒服Aの肩を持ちあげる。鍛えてあるようでどっしりと重い。Bはどうするのかと思つたが無傷の黒服Cが足のとれた黒服Bの足と黒服Aの手を拾つた後、黒服Bの肩を持ちあげていた。黒服Bは激痛に顔を歪ませつつ、笑顔だ。

「ああ、痛いな。大体自分の足をこんな風にした人間から情けを受けるなんて」

「そう言うな、最近の病院は切断後数時間なら手足をくつつけてくれるらしい」

「なぜかはわからないが断面はかなりきれいだぞ。見るか？」

「いや、遠慮しておこう」

そんな事を話しながらビルを出る。外には真っ黒の車が止めてあった。

「少年は助手席に乗ってくれ。道案内を頼む。とりあえず野田は桂

木を車に乗せてくれ」

黒服Bは桂木、黒服Cは野田というらしい。偽名なのかもしれない。Aの名前も聞きたかったが野田が桂木に乗せたので車に乗ってから聞こうとしたその瞬間、

何かが横目に入ったので思わずのけぞる。と、

灰色の津波が爆音とともに車を飲み込んだ。

灰色の波は車もろとも前方のビルを吹き飛ばし、さらに巨大化する。約50m先に見える巨大な灰色の怪物は数時間前人々を飲み込んだ津波の比ではない。

「Genomくん、そのクソガキと何してるのかなあ？」

アロハシャツがいた。眼はいつも通り「イッてる」が表情は怒りに満ちている。その肉食獣すら圧倒するような凶悪な瞳で黒服Aをにらみつけたアロハシャツは乱暴に言う。

「早く答えるよオ、答えねえんなら・・・問答無用でまとめてブツ殺す！！」

アロハシャツがそういうと灰色の怪物は不気味につごめき、巨大な津波へと変貌する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7357m/>

ENGINE

2010年12月18日17時15分発行